

序章

ようこそ深化する学びの世界へ

“通信制の大学院で学ぶ”ということ

教授 志田 民吉

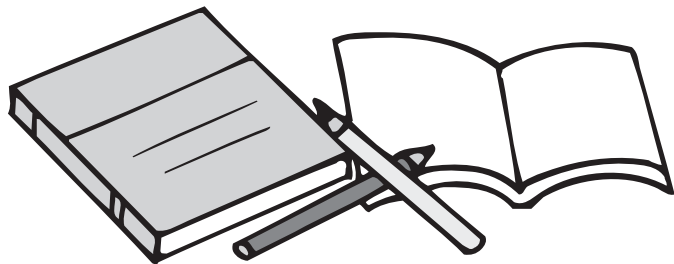
少しだけ硬い表現になりますが、大学院とは“学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥を極め、又は高度の専門性が求められる職業を担うための深い学識及び卓越した能力を培い、文化の進展に寄与する”（学校教育法第99条）ために学ぶところである、ということになります。しかしこの学校教育法（学校教育法だけではなく‘法律’の特色でもあります）の規定はきわめて抽象的な内容であって、その具体的な姿形はそれぞれの時代や社会によって大きく違って顕れてきます。あまり規定の文字表現を重いものとしてとらえないことも必要ではないでしょうか。何よりも大切なことは、私達の共同社会の中で生活をする一人でも多くの人が“良かった”と思えるような事を一つでも増やせるように、一人ひとりがある人なりの努力をすることではないかと思います。また“通信制”と“通学制”，それぞれに一長一短があり、良いところもあればそうでないところも必ずあります。それぞれの人の境遇に合った適切な選択をしながら、生きていることの喜びを一つでも増やせるように活用してこそ意味のある制度の違いである、と思います。

通信制の大学院に学ぶ人は、それぞれにさまざまです。研究職を志す人、専門職業人としての自己研鑽をさらに求める人、それと最近“いわゆる団塊世代”を中心とした“生き甲斐や人生の豊かさ”を求める人、実にさまざまですし、それがまた通信制大学院と言う制度の活かし方でもあろうかと思います。

本学の大学院では、“社会福祉”と“心理”の2専攻を持っておりますが、ともに“総合福祉”で括られています。それぞれの専門領域の研究者、専門職業人を目指す人も、自己の人生をより豊かなものとすることを目指す人も、社会福祉と心理は、これまでに営んできた一人ひとりの人生を活かしながら、自己の人生も、そしてさらに日本の文化にも貢献でき得る学問領域ではないかと思います。“沢山の知識”を持ちなが

らもその使い方・活かし方に戸惑っている人も多く見受けられます（より沢山の知識をため込むだけであれば、それは機械であるパソコンの機能かも知れません）。知識そのものが尽きることのない諸問題を解決してくれるわけではありません。専門知識に限らず、生き方の知識も“活用できる”ことが、活用できないよりは幸せだと思います。

東北福祉大学の大学院は、福祉と心理を総合してより大きな“福祉”を学びうるところです。一つでも多くの“幸せ”を、一人でも多くの人が社会に送り出す側に立てますように、一人でも多くの人の学びを待っております。



修士(社会福祉学)を目指す方々へ—修士論文作成方法序説—

教授 田中 治和

2012年4月に本学に通信制大学院が開設された。私も主査（指導教員）として相当数の修士論文を担当してきた。この小論では、その経験から考えた修士（社会福祉学）を目指す論文作成の進め方について、若干の助言あるいは苦言を述べ、参考文献を紹介する。

主張したいのは、次の二点である。

1 社会福祉学の基礎文献を読むこと。2 学術論文の基本的な書き方・まとめ方を学習すること。つまりしっかりと基礎・基本を踏まえたうえで、院生各自の修士論文のテーマに取り組んでもらいたい。これにつぎる。基礎・基本がなくて、急に論文を書くことは、準備運動がなく長距離走をやることであり、パソコン本体に何一つソフトがなく立ち上げた状態である。少なからずの院生が、修士論文が書けない、まとまらない…と躓く理由の大半は、ここにある。書けない、まとまらないのではなく、（厳しいようだが、何年たっても）書けるはずも、まとまるはずもない。だからこそ、焦らずに基礎・基本から学習しなければならないのではなからうか。

社会福祉実践の展開する場は、“学際的”である。また近年の学問分野・諸科学の動向は、複合化、総合化にある。（これらの論点は、すでに40年前に『大塚久雄著作集第九巻／社会科学の方法』が明らかにしている。）社会福祉学研究を、単に“学際的”という文言を付すだけでは、何も意味しない。時折、院生（福祉学部系以外の出身者及び福祉学部出身者）から、「社会福祉学は曖昧であり、その共通理解の枠組みもない等々」との指摘がある。しかしながら、社会福祉学を体系的把握する努力を、例えば社会福祉理論史、つまり最低限、明治期の慈善事業思想、大正期の社会事業理論、昭和初期の厚生事業理論、戦後の社会福祉理論の梗概を、さらに日本社会福祉学会、日本社会福祉教育連盟の歴史を点検・吟味した上で、「社会福祉学は…」の発言を望みたい。院生の

最初に掲げる研究課題も、すでにこれまでの社会福祉学研究において、一定の論点整理がなされている事が多い。

まずは、先行研究を丁寧に調べ、併せて修士（社会福祉学）の学位名称からしても、社会福祉とは何かという本質を考え、各自の研究が、それといかに連関するかの考究も必要であろう。そのためには、図書館の活用である。本学図書館には、海外文献も含め社会福祉学の基礎文献は十分準備されている。是非、図書館に足しげく通ってもらいたい。遠隔地の方も、スクーリング時に利用されたい。

いかなる専攻分野であれ、極めて基本的事項として、修士論文の書き方・まとめ方の学習が不可欠である。以前は、論文の書き方等は、主に指導教員、時には博士課程や修士課程の先輩の方法を真似る＝学んで、そこから院生各自が自学自習をし、次第に自分の論文の書き方・まとめ方を獲得していく感があった。つまり論文の書き方等は、院生にとって暗黙の事前学習であり、あえて教員側からそれを問う必要はなかった。だが現在の大学院進学者の急増は、今一步具体的に説明する責任が生じてきた。

論文の書き方等の書籍は数多く出版されているが、以下、その中でも比較的安価で入手しやすい一新書版のものを、ひとまず発行順に紹介しておきたい。なお、これに拘わらず、院生各自が、書店で手にとって相性の良い『論文の書き方・まとめ方』の本を購入することが、修士論文作成の第一歩であろう。

山内志朗『ぎりぎり合格への論文マニュアル』（平凡社新書、2001年）、鹿島茂『勝つための論文の書き方』（文春新書、2003年）、小笠原喜康『新版 大学生のためのレポート・論文術』（講談社現代新書、2009年）。尚、併せて斎藤孝・西岡達裕『学術論文の技法 新訂版』（日本エディタースクール出版部、2005年）も推奨する。付録として、多忙な通信制大学院生への推薦書として、丸山オー『思考のレッスン』（文春文庫、2002年）、奥野宣之『情報は一冊のノートにまとめなさい』（ナナ・コーポレート・コミュニケーション、2008年）。

通信制大学院福祉心理学専攻で学ぶこと

教授 宇田川 一夫

1. 大学院における福祉心理学専攻とは

院生の皆さんが専攻している「福祉心理学」とは、何を目的としている学問なのでしょう。福祉心理学とは、広義の意味では、人々の福祉（幸福）のために心理学を活用することであり、狭義の意味では、福祉の対象となっている人々に対して心理学的アプローチを行うことであると言えるでしょう。ただ、よく誤解されることは「福祉心理学」という名称から、「福祉学」と「心理学」を両方学ぶことが出来ると理解している人が多いです。大学院は、専門性を習得するところですので「福祉学」も「心理学」も独自の深い専門領域を持っていますので、この両者を同時に学ぶことは、時間的にも能力的にも無理があります。

福祉心理学とは、心理学を基本として、その視点を福祉領域に活用する学問と言ってよいでしょう。本学は、一部福祉学と互換性を持ったカリキュラムを組んでいますが、あくまでも基礎は心理学専攻です。従いまして、学部で学んだいろいろな領域の心理学をより専門的に深めていくのが福祉心理学専攻と言えます。

通信制大学院の入学者の中に学部で心理系を学んだ人とそれ以外の人があります。大学院ですので、学部レベルの心理学を学んだことを前提に授業を組んでおります。学部で心理学を学ばなかった人は、その分自分で学習していく必要があります。院生の中には、学部で心理学を専攻しないため苦労している人と心理学を学んだ人以上に力を付けていく人もいます。このように「化ける人」が育っていくことも通信制の魅力のひとつです。

2. 修士論文の作成に向けて

修士論文は、約2年間に各自がどれだけ心理学を学んできたかが集約されます。今まで修士論文を書き上げた院生は、その背景から4つの群に分類することができそうです。1群は、心理系の学科を卒業し、心理

学を生かせる職業（医療，教育，福祉，司法等）に就いている群です。2群は，心理系を卒業していますが，一般職（主婦も含めて）に就いている群です。3群は，心理系以外の学科を卒業して，心理系の職業に就いている群です。4群は，心理系以外の学科を卒業して，非心理系の職業に就いている人です。1・3群の人は，経験は豊かですが，それを心理学としての研究法にまでまとめていくのに苦労しているようです。2・4群の人は，心理学研究法の習得と研究対象者を見つけなくてはなりません。「非行少年の親子関係を研究をしたい」と言っても，現実的に非行少年にアンケートを取るとしたら「命がけ」のこととなります。この問題を解決していくひとつとしては，心理学研究法をより深めて勉強することであろうと思います。具体的には，興味ある学会誌等を体系的に読み進めることです。そのことにより身近な子ども，友人，同僚等を対象に研究が可能となります。

3. 心理学の研究法

心理学科は，教育学部・文学部等人文科学系に属しています。また，マスコミ等の影響から，研究法は，文献等から自分の考えを論述することと理解している人が多いようです。心理学の歴史を見ると分かりますように心理学が哲学から分離した要因は，「科学的実証性」を確立したことによります。ですから，心理学は，理科系に近い実証科学と言っても過言ではありません。一般的意味での「こころ」を扱うほど心理学は発展していません。心理学は，心理学で扱う「こころ」の範囲以内でしか研究対象としていません。特に一般的意味での「こころ」に興味を持っている人は，そのことを理解しにくいようです。

修士論文の研究法は，何をテーマに研究したいのか（目的：従属変数），従属変数に影響を与える変数は何か（説明：独立変数）の組み合わせにより，よい論文か否かが決まります。

次に研究の枠が決まったら，実験・調査等を行います，その結果の分析は，心理統計学等を使用して数学的，客観的に実証します。そしてその結果に基づき考察を進めていきます。

「事例研究法」は，それほど厳格ではありませんが，変数の取り方は変わりません。

4. 福祉心理学が求められていること

現代の日本では、物質的には豊かになりましたが、人間としてのところが貧しくなっています。物質的な豊かさが「幸福になれる」との錯覚から、人間関係を深めることを怠ってきたからではないかと思います。

このような現代社会の中にあって本学福祉心理学専攻の皆さんは、社会が要請している「人間性の回復」に応えられるよう一層の福祉心理学の理論と実践の研究を進めていくことが求められています。

学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

本学通信制大学院の「修了資格＝学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）」は下記のとおりです。修了時に下記のような力が身につくように在学中の学修を積み重ねてください。

専攻ごとに、下記のような能力を身につけ、かつ所定の単位を修得した院生に修了を認定します。

社会福祉学専攻

学修の評価、学位の授与に関する方針（ディプロマ・ポリシー）

修士課程の所定の科目を履修し、かつ社会福祉に関連する学問分野の諸問題を解決するための研究力や実践力を修得したと評価するに値する成果（修士論文）を提出できた人に修士の学位を授与します。

福祉心理学専攻

学修の評価、学位の授与に関する方針（ディプロマ・ポリシー）

- ・心理学の基礎的素養と心理学に関する専門的知識と技術を修得している。
- ・福祉心理学に関する研究課題を自ら設定し、専門的知識と適切な方法を持って研究できる。
- ・福祉の対象である人・家族・地域・環境を対象にかかわる際の福祉心理学的実践力を修得している。

上記を修得したと評価するに値する成果（修士論文）を提出できた人に修士の学位を授与します。

